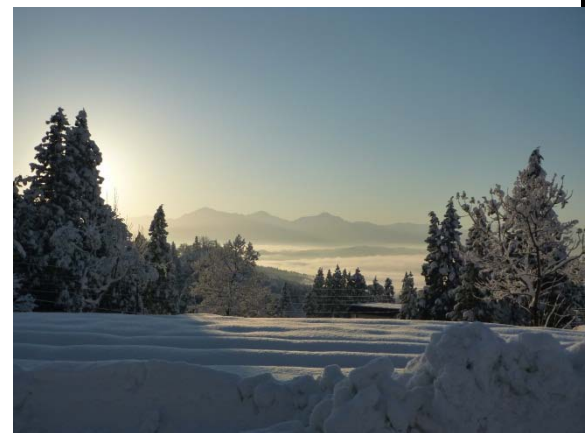




「地域再生のヒント」 地元学と復興



草郷 孝好
2011年6月4日（土）



2011年3月11日

あの日、みなさんは、どこで何をしていましたか。

私は、大学7階の研究室で報告書作成中でした。「締切近すぎー」というプレッシャーで必死にワープロ打ちしてました。

そうしたら、「ゆらーりゆらーり感」があり、「ん、これは地震だ」と。

外に出ると、他の先生や学生にも会って、「今、揺れましたよねー」と。お互いにうなづいていました。

しかし、「震源はどこなんだろうー」と気になり、テレビはないので、ネットでチェック。

すると、震源は東北、津波警報発令中ではありませんか！

即断、報告書の締め切りよりも、何よりも、家族のことを頭に思い浮かべました。即、家に向かいました。

これは、私事なのですが、みなさん、時間も場所もまったく違うけれど、3月11日の午後をどのように過ごしたのでしょうか。

3月11日からしばらくの間

震災によって、気づくことができました。

悲劇の大きさに圧倒されてしまいました

原発のことには、自責の念と怒りが混在しました

町や村が無くなる、家族や知り合いを突然失う。戦争もそうだけど、こんな悲劇があっていいのかということに、言い知れぬ底知れぬ無力感に襲われました

だから、長い間、沈黙しました。ほんとうに心から話す気になれませんでしたから

ひたすら「祈り」しました

人が生きていくためには何が必要なのだろう、と、以前にも増して繰り返し、繰り返し考えていました

時間が経つにつれて

思うようになったことがあります。

衣食住に充たされた生活って、奇跡に違いないと再確認できた

ＩＴなどで、世界は確かに狭くなっているようだけど、お互いのことを理解し合うには相当な距離があるんだなあ

これからどうやって生きていこうか。生活の哲学しようか。

そんなことを考えているときに、浮かんできたのは、知り合いの生き生きした顔、顔、顔でした。

そうか、やっぱり一人の力も決して無力なのではないという思い（込み）が見事に復活しました

今、ここにいます

浮かんできた顔、顔、顔の住む町、それは水俣、新潟、ブータン、ネパール、などなど。

みなさん、水俣って聞いたことがありますか？

昔の水俣（海辺の町）



昔の水俣（水俣川べり）



昔の水俣（祭り、ボートレース）



昔の水俣（街並み）



昔の水俣（呉服屋）



昔の水俣（山間の村）



水俣が経験したこと

水俣は大きな震災にあったわけではありません。フクシマで起きた原発問題ではないけれど、深刻な「人災」を先に経験しました

そう、水俣病です

これは、伝染病ではありません。工場から海に垂れ流された水銀汚染で起きた中毒で、治療法はありません。

明治後期、戦時中、戦後と長きにわたっての産業開発、豊かな生活を実現するための工場だったのですね。

水俣病で、水俣町は大変な目にあいました。





1956年
水俣病患者の公式確認

1968年
水俣病の原因の公式確認



地域内の対立、分断化と孤立化



水俣は環境モデル都市なんです！

水俣の人々は、人と人との間には不信ばかりという時代を長く経験しました。

でも、この20年間、水俣を少しずつ変えていく歩みをしているのをご存知でしたか？（たぶん、ご存じないでしょう。）

2008年には、環境モデル都市に選ばれたのをご存知でしたか？（環境モデル都市という言葉も、ご存知でした？）

どんなことが起きたのか、いろいろとお話ししたいところですが、今日は、その中でも、震災からの復興につながるかもしれない「地元学」について、お話ししますね。

水俣の地元学

水俣の地元学：地元の学問ではありません。

「**地元に学ぶ**」という意味です。

吉本哲郎さんが考え出しました。



水俣の地元学

吉本さんのアイデアのもと、水俣病患者の一人杉本栄子さん、当時の市長の吉井正澄さん、そして、彼の昔からの仲間たちでした。

「人様は変えられないから、自分が変わる」

「海ん者と山ん者がつながれば、まちはどうにかなる」

「もやいなおし」、「行政参加」

「寄るかい水俣」

などなど。



頭石の地元学について紹介しましょう

頭石、水俣市



以前は、ほとんど訪問する人がいない集落。
理由がないからやってこない。
村からは、若者が都会へ出ていきました。

役所に何かやってもらおうかなあ

市役所に出向き、過疎の進む村を助けてくれないかと相談

そうしたら、市役所からは「元気村づくり条例」と村まるごと博物館を勧められたのです。残念なことに、ちょっと期待した役所からのお金はもらえませんでした。

わけわからんが、やってみるか、ということに。でも、不安が。。。そこで、吉本さんは肩を押しました

「いやなら、いつでもやめていいんだからー」

生活学芸員・村まるごと博物館



頭石の8人衆（と、私が呼んでいるだけ）
生活学芸員は集落の案内をする

頭石



地元のお寺



湧き水



養蜂箱



お蔵



心得は1つ「学芸員は、ここには何もないといっているはいけない。」
訪問者（外部者、風の人）の目線で集落の中にあるものを
さがし、気づく相互交流

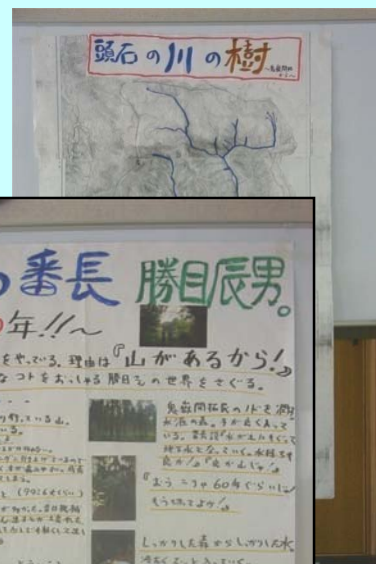


①調べる



②分析

③絵地図作り



④振り返り 学芸員に絵地図を贈呈

それで、頭石はどうなったと思います？

博物館開設でたくさんの人とつながりました

- 国内外から3000人以上の訪問者
- 海外から、タンザニア、ザンビア、ケニア、ブラジル、タイ、ネパール、ラオス、ベトナム、ウガンダ、オーストラリア、インドネシア、コロンビアなど

博物館や手作り弁当（これ、うまいんですよ！）収入の1部を集落基金にしました

女性のグループで加工所を立ち上げました。ほぼ完全な地元食材でお弁当を作り、ビジネス開始。やっと、頭石という村があることが認知され出しました

学芸会のシナリオに村の歴史や踊りを取り入れることにしました

なんと、農水省などから「活力のある地域」の賞をもらうまでに、元気が出てきました

地元学は水俣の外にも広がっています

国内でも、海外でも、関心を集めています

地元の人が主役になって、地元には根をはやし、地元を大切にし、知恵を使って、工夫していくのが楽しい

地元の仲間とのつながりを大切にする

地元の外の人とのつながりで得た違う考えや見方から刺激を受け、新しい見方を見出していきます

さて、震災に話を移しましょう

新潟中越地震のお話です

新潟中越地震は、2004年10月23日に発生しました。

震源は、新潟県旧川口町木沢（山間の村）でした。

木沢集落は、大きなダメージを受けました。

- 全壊、ほぼ全壊、半壊という家々。村に残るのか、それとも、離れるのか、の選択を迫られたわけです。
- 農地もダメージを受けました。

結果、半数近くは離れていきました。

40代でも若いぞと言われる高齢化の進む過疎の集落なので、村の存続が問われ続けている村です。

今も、木沢の生活は続いているのです。

地震はマイナス面ばかりではなかった

いやあ、見直した：土木作業、重機の活躍

自分もそれなりの年齢なのに、いつでも、
「木沢のお年寄りが元気になるんならさ」と
という言葉が自然に口をついて出る

木沢の良さを見つけて、それを見てもらおう
という集落元気づくりの取り組み

地震はマイナス面ばかりではなかった

村おこしのグループ「フレンドシップ木沢」の立ち上げ

木沢集落と周りの集落とのつながりの再開：20村郷盆踊りの再開。

地面にはヒビが入ったけれど、そのヒビによって、近所のつながりの大切さ、その力の凄さに気づいた。

たとえば、Hさんは、会社人間だったけれど、震災後、集落のつながりの大切さに気づき、再生のために身を粉にしてきた。でも、それが楽しくて仕方がないということです。



マチの若者たちの支援（ボランティア）

「過疎の集落、大変じゃないか。何かしたい、できるはずだ。」

学生の足湯隊の支援

訪問すると、木沢の生き方から、自分の生き方を考え直すきっかけになる

住み込む学生、何度でも足を運ぶ若者。なぜか、名誉村民になったりする

逆に元気をもらってくるマチの若者たち

木沢を創ってきた生きる達人



おわりに

「支援金」が大きくなれば、復旧の可能性は高まるでしょう。でも、それは、必ずしも社会の「復興」や「再生」を意味しません

復興の主役は誰なのか、復興はどのような状態のことなのか、を問い続けていくことです

おわりに

地元の人が主役だけれど、押し付けずにつながれる地元以外の人の存在はとても大切です

つながり方ですが、相手を支配・強制・矯正するのでは何も生まれません。偉い役所の人や学者の中には、地元の人との向き合い方に反省が必要でしょう

相手の見方には必ず一理あります。それを受け止めれば、お互いに何かを触発されます。たまに、まったくの勘違いもあるでしょうけど。でも、それが、お互いを知る、もやいなおしの最初の一步になるのだろうと思います

おわりに

そうすると、生み出す機運というのでしょうか、マイナスをプラスに変える、マイナスの状況から、プラスな何かを見つけ出す、ことが見つかるようです

地元学には「ないものをねだらない、あるものから探す」という言葉があります。これは、私たち自身に多くのことを伝えてくれることだろうと思います

